

CULTURE FIRST

はじめに文化ありき



2008. 1. 15

CULTURE FIRST

はじめに文化ありき

私たちは、流通の拡大ばかりが優先され、作品やコンテンツなどの創作物を単なる「もの」としか見ないわが国の昨今の風潮を改めるべく、文化の担い手として社会に喜びと潤いをもたらす役割を果たしてゆくことをあらためて表明するとともに、次の3つの行動理念を掲げ、最先端の知財立国として、世界に冠たる「文化（Culture）」が重要視される社会の実現を求めます。

- (1) 文化の振興こそが、真の知財立国の実現につながることにについて、国民の理解を求めるとともに、その役割を担っていくことを表明します。
- (2) 経済の発展や情報社会の拡大を目的としたどんな提案や計画も、文化の担い手を犠牲にして進められることのないよう、関係者並びに政府の理解を求めます。
- (3) 知財先進国の経済発展を支えるのは、市場を賑わす種々の製品だけでなく、文化の担い手によって生み出される作品やコンテンツの豊かさと多様性でもあることを強調します。

◇わが国の私的録音録画補償金制度の危機

技術の発展により、誰でも画質や音質を全く劣化させずにコピーできるようになったばかりか、ますます高速に大量のコピーをいとも簡単に家庭内で作成できるようになりました。

平成4年には、当時既に広く行われていた私的コピーが権利者に与える経済的な影響を穴埋めする手段として「補償金制度」が導入されましたが、今日の社会全体としてのコピー総量は当時と比較にならないほど増加し、しかも増加に歯止めがかからない状況にあります。ところが、その一方で現在の私的録音録画補償金制度では、新たに登場した私的コピーを可能とする製品、例えばパソコンや携帯音楽プレイヤー、携帯電話、カーナビ等が課金対象となっていないために機能不全に陥っており、私たちが受け取る補償金の額も激減するという危機的な状況にあります。

◇今こそ「Culture First～はじめに文化ありき～」

そこで私たちは、私的録音録画補償金制度の適正な見直しを実現するため、ヨーロッパで大きな成果を上げたCulture First!連合を参考として、左のとおり「Culture First～はじめに文化ありき～」の行動理念を掲げるとともに、広く国民の理解を得るための活動を開始することを決意しました。

デジタル技術が発達し、私的なコピーが人々にとってより身近になった今だからこそ、そうした社会には欠かせないインフラのひとつとして、私的録音録画補償金制度がその役割と機能を十分に発揮すべきであるということについて、「Culture First～はじめに文化ありき～」の行動理念を踏まえ、皆様に広くご理解いただけるよう活動を展開していきます。

◇参考: Culture First!連合とは

欧州では情報通信技術・電子機器業界からの強い圧力によって、欧州委員会（EUの行政執行機関）が、2005年末、権利者へ他の補償方法を提供する可能性のあるDRM（著作権保護技術）などの新しい技術および機器を考慮し、補償金制度は段階的な廃止へ向けて検討する意向を表明しました。

このことが及ぼす悪影響を危惧したCISAC/BIEM(著作権協会国際連合/録音権協会国際事務局)による2006年1月の意見表明をきっかけに、同年9月、様々な分野の17権利者団体やコンテンツ産業グループ等が協力するかたちでCulture First!連合が結成され、欧州委員会に対し、補償金制度の文化的および経済的な利点ならびに創作者の作品の私的コピーを管理する上でのDRM技術等の非効率性について理解を求める働きかけを実施しました。その結果、Culture First!連合は、2006年12月、欧州委員会委員長にそうした見直し計画を放棄させることに成功しました。

The Message for CULTURE FIRST

はじめに文化ありき

作曲家 船村徹



作曲家の船村徹です。

私はかれこれもう 60 年近くになるでしょうか、作曲を始めましてずっと音楽漬けの人生を過ごしてきましたわけですが、やはり音楽というのは、ご案内のように、涙や笑いや、いろいろ一緒になって人生をうたっていくわけです。中にはそんなことで、一つの作品が生涯の皆様の友になってしまう、というようなこともあるような気がします。

そういう仕事をずっとやってこられた今、音楽というのは空気みたいなもので、それが本当の「文化」ではないだろうか、と私は思うのです。

文明の利器がいろいろ発達しまして、いろんな機械が出てまいります。しかし、機械文明優先で良いのでしょうか。昔、あの名優チャップリンが、機械文明に人間が振り回されてしまう、というようなことを映画でよくおっしゃっていましたが、そんなところも考えられる昨今であるような気がします。

何といっても、それこそ「Culture First～はじめに文化ありき～」です。「Culture First」、「Culture First」と私は本当に何べんも何べんも自分に言い聞かせたり、世間にまた言って歩きたいと思っております。それこそ、「Culture First」です。

そういうことで、「Culture First」で日本の社会をつくっていききたいと、本当に心から念じております。◇

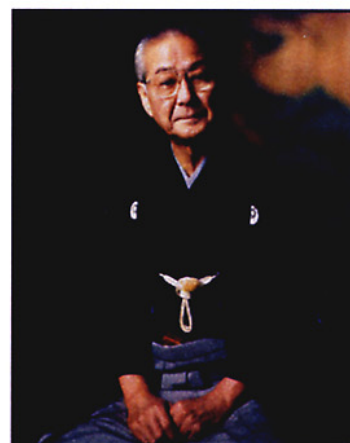
和泉流狂言師 初世 野村萬

野村萬でございます。

私は古典芸能を生業にいたしておりますので、いささか古いたとえを申し上げて恐縮でございますが、私ども実演家が、日々研鑽を積み重ねております無形の芸と言うものと、それを支えてくださる有形のものとが、お互いに約束事というものをしっかり守って切磋琢磨をしながら、何百年という伝承がなされてきたわけでございます。

おりから、私的録音録画補償金制度のあり方をめぐって、メーカーの方々と権利者との間で、色々ご議論が積み重ねられているとかがっておりますが、それもただいま申したように、約束事、公正なルールというものをお互いの信頼感の上に立って守っていくことが、なんとしても文化振興のための原点として大切ではなかろうかと、愚考をいたします。能という芸能を大成しました世阿弥という人が、600 年前に「衆人愛敬」という言葉を残しております。芸能というものはすべからず、多くの人に愛されなければならないという意味であります。私どもの無形の芸を固定されたものによって流通をし、それをより多くの方々に豊かに広く享受していただく、これがすなわち世阿弥のいう「衆人愛敬」という言葉だろうと思っております。

わが国がこれから、文化大国というものを目指していく以上、このたびの「Culture First」というご提案を本当に力強く、大事にしていかなければならないと思っております。よろしく願いをいたします。◇



作曲家 都倉俊一

都倉俊一です。

デジタル技術というのはやはり画期的な技術で、これがないとやはり今はもう音楽業界はやっていけないわけですね。しかし他方、デジタルという技術は、ある種「パンドラの箱」を空けてしまったようなもの。この技術によって私的録音録画、海賊版のもとになっている不法録音録画が堂々と、我々がスタジオでつくった音そのままにいろいろなところで海賊版として売られている。こういう技術を提供してしまったことも事実です。

私は、技術と Culture というものは、やはりどうしても共存しなければならない運命にあると思っています。技術と環境の問題でも、例えば車が発明された時代に、あるいは日本が車社会になっていく過程で、世界的になった日本の車メーカーが「環境との共存」ということを果たしてあの当時考えていたのでしょうか。僕は考えていなかったと思います。しかし今、これだけエコロジーが叫ばれているなかで「環境と車」というものを考えない自動車工業界というのは僕は考えられなくなっていると思うんですね。

それと同じように、デジタル技術という素晴らしい技術を開発した企業ならびにマーケットが、著作権や文化を大切にしようという認識、そして、この技術によって、もし万が一にでも、文化が侵されるようなことがあってはいけない、という認識をやはり企業側が持つべきだと僕は思います。

そして初めて、文化が花開き、そしてデジタル技術という素晴らしい技術によって、作品が、Culture が、世界中に広まっていく、こういう共存を私は心から願っております。◇



歌舞伎役者 十二代目 市川團十郎

市川團十郎でございます。

昨年3月、パリ、ガルニエ、オペラ座で初めての歌舞伎公演をさせていただきました。パリ、ガルニエから招聘を受けまして歌舞伎を演じさせていただきましたが、そのとき感じたことは、欧州の方々は日本に対する大変関心が高いということに気がつきました。これは日本の方々が思っているよりも、もっと関心があるというふうに感じました。

日本の芸能、歌舞伎、能、文楽、また料理、それから絵画、漫画、それぞれ大変興味を持っておられる・・・その原因は何かと考えると、また、現地の方々とお話をさせていただいたところ、日本は、古いものと新しいものを渾然として両立させている、そういう文化と知恵があると、そこに興味があるというのが、まあひとつであろうというふうに感じました。日本人の中には「おたから」、先祖から受け継いだ「物の財産」、また、新しいコンピュータ購入ということで、その物質を目の前にすると「財産」＝「おたから」という感覚を持ちやすいですけれども、実際は、江戸時代からわれわれ歌舞伎が引き継いできているのも「先祖の知恵」、それから現代の「先輩の知恵」が結集している大変な「おたから」である、「財産」である、これがなかなか、気がつかないところだと思います。

これから、ハードの部分が大変発達する中で、やはりソフトという「知恵」、「文化」が遅れては絶対いけないと思っています。また、改めて知的財産というものを「財産」として「おたから」として感じる日本人にならなければならないと思っています。

その中で、今回、「Culture First」という考え方、確かに文化がなければ何もないということもあると思います。ただ私とすると、「物と知恵」、「体と脳」、これが両立してこそ、はじめて健全な肉体が、また人間ができると、同じように、社会も「ハード」と「ソフト」、このバランスを、ぜひこれから考えていただきたいと思っています。◇





作曲家 服部克久

経済や情報社会の拡大ももちろん大切ですが、そのために文化をないがしろにするような考えは誤りです。文化は、生活を、平和を支えているものです。その文化が枯渇してしまったら、生きていく上での潤いもまた失われてしまいます。

楽しいときも、辛いときも、音楽や映像作品に囲まれているからこそ、これまでも、これからもずっと楽しく生き活きと生きていけるのです。そのような環境でこそ、社会も明るく伸びやかに発展していくのではないのでしょうか。

そうした大きな力を持つ文化の担い手として私たち創り手が果たしている役割に、もっともってご理解をいただきたい、枯渇したりすることのないよう、真剣に考えて

いただきたいのです。

そして次の、その次の世代へと素晴らしい文化と、文化を守る風土を引き継いで行こうではありませんか。

Culture First、私たちの願いです。◇

落語家 三遊亭小遊三

落語芸術協会の三遊亭小遊三でございます。

本来ですと手前どもの協会の会長、桂歌丸がご挨拶するところでございますけれども、今朝8時くらいでございますかね・・・家族に見守られて・・・朝食を食べてた！ということでございます。

私が代わりでございますけれど、私がこの業界に入った時に、その当時の幹部の師匠から、幹部といってもわずらった部分じゃありませんで、明治生まれの大看板の師匠に、「世の中にねえ、あってもなくてもいい商売ってのはあるけれど、噺家ってのは、なくてもなくてもいい商売だからね」といきなり脅かされて、えらいところに入っちゃったなと、思ったんでございますが、でもまあ私演芸人として、例えば、歌舞伎、それから演劇、邦楽、洋楽、様々な芸能がございます。こういうものを見たり聞いたりさせていただいておりますが、これはもう私の芸の肥やしにもなりますし、また、潤いというものが、非常に生活に出てくるものでございます。

したがってまあ、演芸も多少は皆様方に、そういった潤いを与えているかなあと、そういうわずかな自信はあるわけでございます。落語に限って申し上げますと、寄席というものができまして、200年ちょっとというところでございますか、私もちゃんと調べようと思ひまして、この間図書館に行って書物を紐解いてみましたら、面白いものですね、書物ってのは紐解くとばらばらになっちゃうんで、あんまりはっきりとしたことはわからなかったんですが、ちょんまげ結った時代から、寄席というものがございます。これはもちろん当時から民間でございまして、お客様から木戸銭をいただきまして、それを楽屋で分けると、このシステムをずっと続けております。そりゃ、決して楽なもんじゃございません。

でもまあ、平成11年に、文化芸術振興基本法が施行されまして、おかげさまでアーツプランというものを頂き、寄席だけの活動にも少しは潤いが出で参りましたのと同時に、地方興行ですとか、海外公演という、これはもう、昔の師匠たちがびっくりするんじゃないかなと思います。もっともあの、戦争中満州へ行ったら話もありますけど、そうじゃなくて、アメリカですとか・・・この間歌丸会長がインドへ行きましてですね、インドで落語というのはびっくりしましたですね。歌丸師匠もむこうで少し体調を崩しまして、ちょっと病院へ行ってやっとこ帰ってきたと。で、師匠大丈夫ですかっていったら、インドだけに「カルカッタ」なんてまあ、ちゃんちゃんですけれども、そういう活動もさせていただいております。ありがたい限りでございます。

そこへもってきて、こんど「Culture First」というキャッチフレーズができて、なんとなくいいですね、やっぱり文化ありきという、健康の次に文化でございます。手前どもも、この「Culture First」を旗印に、まあ、多少なりとも、社会に貢献できればと、思っております。こんごともどうぞよろしくお願いをいたします。失礼をいたしました。おあとと交代。◇



作曲家 すぎやまこういち

作曲家のすぎやまこういちです。宜しくお願いします。

昔から言われる言葉で「コンピュータ、ソフトが無ければただの箱」という言葉があります。うまいこと言ったもんだなあと思います。

コンピュータにしてもiPodにしても、いろいろな電子機器があるわけですが、電子機器はソフトウェアが無ければ何の役にも立たない。ソフトウェアというものが電子機器にとって如何に大切か、ということがよくわかります。

ソフトウェア、例えばiPodのような電子機器であれば、そこに音楽や映像を取り込んで、それを再生して楽しむ、音楽や映像があって初めて意味があるわけなんです。

ですから、是非とも電子機器を製造するメーカーの方々にわかっていただきたいのは、ソフトウェアに対する対価、これがそれぞれの電子機器の当然のコストであるというふうに考えていただきたいものです。本当にソフトウェアが無ければそうした機器はひとつも売れないでしょう。ソフトウェアに対するしっかりした経済的な補償があって初めて、21世紀の知財立国であるべき我が国も栄えていくのではないのでしょうか。是非、宜しくお願いしたいと思います。◇



作曲家 川口真

作曲家の川口真です。

いま、私たちの周りでは映像や音楽をコピーして楽しむことが盛んに行われています。映像や音楽を楽しむこと自体は素晴らしいことですが、コピーの氾濫は私たちにとって困ったことにもなっています。この問題は単に、私たちに損害を与えているだけではなく、もっと大きな問題をはらんでいると思います。それは映像や音楽の文化が発展することに対して、マイナスの要因として働いている部分があるからです。芸術文化が盛んにならないとコンテンツも振興しません。

この文化を畑の土に例えるとしますと、コピーとその対価である補償制度は水や養分にあたると 생각합니다。これらがあってはじめて豊かな土地ができ、その土地に文化の花が開くと思います。もしコピーばかりして補償がないという事になりますと、土は痩せてしまって花は枯れてしまうでしょう。

このことを皆さまに分かって頂きたい。是非共感して頂きたいということで、私たちは「Culture First～はじめに文化ありき～」を提唱いたします。この「Culture First」が皆様に広く受け入れられ、ご賛同を得られることを心から願っております。

「Culture First」、よろしくお願い致します。ありがとうございました。◇

作曲家 小六禮次郎

豊かに物があふれる時代、世界の中でまれにみる平和な日本、そこで「Culture First～はじめに文化ありき～」と叫ばなければならないのは、なんと皮肉なことでしょう。

私たち、音楽、映像、文学、美術などなど、かたちのはっきりと見えないものをつくる创作者たちは、最先端デジタル技術におびやかされています。

デジタル技術は、時間を超え、同質で大量のコピーを可能にしました。同質で大量のコピーは私たちをどんどん追い込んできています。

もちろん一人の消費者でもある私たちは多大なデジタルの恩恵を受けています。また、私的なコピーは「新しい文化」だと認識しています。だからこそ補償金制度で「新しい文化」と私たちの権利である「コピーライト」、双方を守りたいと主張しています。インフラとして補償金制度は、「私たちの文化」を支え育むと確信しています。◇



■デジタル私的録画問題に関する権利者会議

(社)日本文藝家協会	理事長 坂上弘
(協)日本脚本家連盟	理事長 金子成人
(協)日本シナリオ作家協会	理事長 西岡琢也
(社)全日本テレビ番組製作社連盟	理事長 工藤英博
(社)日本映画製作者連盟	会長 松岡功
(中)日本動画協会	理事長 松谷孝征
(社)日本映像ソフト協会	会長 高井英幸
(協)日本映画製作者協会	代表理事 新藤次郎
(社)日本芸能実演家団体協議会	会長 野村萬
(社)日本音楽事業者協会	会長 尾木徹
(社)音楽出版社協会	会長 朝妻一郎
(社)音楽制作者連盟	理事長 大石征裕
(社)日本音楽著作権協会	会長 船村徹
(社)日本レコード協会	会長 石坂敬一

日本音楽作家団体協議会	理事長 川口真
詩と音楽の会	会長 平井丈一郎
全日本音楽著作家協会	会長 遠藤実
全日本児童音楽協会	会長 北澤秀夫
日本音楽著作家連合	会長 志賀大介
日本歌謡芸術協会	会長 曾根幸明
日本現代音楽協会	会長 福士則夫
(社)日本作曲家協会	会長 遠藤実
(社)日本作曲家協議会	会長 三枝成彰
(社)日本作詩家協会	会長 星野哲郎
日本作編曲家協会	会長 服部克久
日本詩人連盟	会長 平山忠夫
(社)日本童謡協会	会長 湯山昭
日本訳詩家協会	会長 永田文夫

■賛同団体

関西俳優協議会	会長 田中弘史
名古屋放送芸能家協議会	理事長 舟木淳
(社)日本映画俳優協会	理事長 池部良
(社)日本喜劇人協会	会長 橋達也
(中)日本芸能マネージメント事業者協会	理事長 山崎譲
(社)日本劇団協議会	会長 成井市郎
日本新劇製作者協会	会長 水谷内助義
日本新劇俳優協会	会長 小沢昭一
日本人形劇人協会	会長 長谷川正明
(社)日本俳優協会	会長 中村雀右衛門
(協)日本俳優連合	理事長 里見浩太郎
日本モデルエージェンシー協会	理事長 小林信治
(特活)人形浄瑠璃文楽座	理事長 鳥越文蔵
(社)能楽協会	理事長 野村萬
大阪三曲協会	理事長 中島警子
(社)関西常磐津協会	理事長 常磐津一巴太夫
(社)義太夫協会	会長 波多一索
清元協会	会長 清元延壽太夫
(特活)筑前琵琶連合会	理事長 中村チエ
(社)当道音楽会	理事長 寺田為三
常磐津協会	会長 常磐津文字太夫
(社)長唄協会	会長 鳥羽屋里長
名古屋邦楽協会	会長 長谷川栄胤
(社)日本三曲協会	会長 米川文子
日本琵琶楽協会	会長 山岡知博
(社)日本演奏連盟	理事長 伊藤京子
(社)日本オーケストラ連盟	理事長 児玉幸治
日本オペラ連盟	理事長 五十嵐喜芳
日本音楽家ユニオン	代表運営委員 崎元譲
(社)日本歌手協会	会長 ペギー葉山
日本シャンソン協会	会長 石井好子

日本シンセサイザー・プログラマー協会	会長 松武秀樹
(特活)日本青少年音楽芸能協会	理事長 廣瀬清
パブリック・イン・サード会	代表幹事 椎名和夫
(特活)レコーディング・ミュージシャンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン	理事長 篠崎正嗣
(社)現代舞踊協会	会長 植木浩
東京バレエ協議会	理事長 佐々木忠次
(社)全日本児童舞踊協会	会長 中村明
名古屋洋舞家協議会	会長 越智實
(社)日本バレエ協会	会長 薄井憲二
(社)日本舞踊協会	会長 犬丸直
日本フラメンコ協会	会長 濱田滋郎
(社)上方落語協会	会長 桂三枝
関西演芸協会	会長 桂福団治
関西芸能親和会	会長 羽田たか志
講談協会	会長 宝井馬琴
太神楽曲芸協会	会長 鏡味仙三郎
東京演芸協会	会長 牧伸二
(社)日本奇術協会	会長 渚晴彦
日本司会芸能協会	会長 玉置宏
ボーイズバラエティ協会	会長 灘康次
(社)漫才協会	会長 青空球児
(社)落語協会	会長 鈴々舎馬風
(社)落語芸術協会	会長 桂歌丸
(社)浪曲親友協会	会長 真山一郎
沖縄県芸能関連協議会	会長 島袋正雄
(社)日本照明家協会	会長 谷川富也
日本舞台監督協会	会長 三宅博
日本民俗芸能協会	会長 福田一平

全 87 団体 (順不同)